

二月の御教え

信心する人は、めぐりを取り払ってもらっているのであるが、信心しないで、うかうか暮らす人は、めぐりを積んでいるのである。

……「天地は語る」第八十五条……

解説

かつて私が若い頃、ある教会の初代先生の「信心は過去の清算」という御教えを聞いた時、余りにも現代的な言い回しに戸惑いました。しかし、その意味は「私たち人間は、天地の親神様の恩徳の中に命を頂き、そのお恵みを蒙って生かされているのに、そのことを知らずして、自分勝手な生き方を積み重ねたご無礼の結果が、今の私たち個々の、又、家の不幸の集積（めぐり）となっている。故に、それら不幸の集積（めぐり）を取り払って頂く為には信心の稽古が欠かせない」との事でした。「うちは信心しているのに不幸なことが多い。あそこは信心していないのに幸福だ」との疑問を抱く人があります。が、「積善の家に余慶あり」との言い伝えの如く、今、特に信心していなくても幸福なのは、かつての先祖の篤い信仰による善行の御蔭であります。しかし、先祖の徳に甘んじて、うかうかと暮らしていれば、徳切れになりめぐりを積みまますので、改めて信心の継承が欠かせません。そこで、私たち信奉者は、改まりの心を以て日々の信心の稽古に勤しみ、神様の御思いを分からせて頂き、そのご恩に報わせて頂くことが徳積みになるのであります。